

# 鎖国下日本と世界に繋がる海の交易ルート

——西鶴文学を視座として——

森 田 雅 也

## 1. はじめに

日本の江戸時代における「鎖国」とは「国をとざし外国との交際を断つこと。特に、江戸幕府がキリスト教や外国勢力の流入を恐れ、海外通交の統制をはかるため、寛永 16 年（1639）から安政元年（1854）までの 215 年間、朝鮮・中国・オランダを除く諸外国との通商、往来や日本人の海外渡航を禁止したこと<sup>(1)</sup>。」というのが日本においても、世界においてもこの歴史的政策への一般的な共時理解であるといえよう。日本が 17 世紀の初めから何年もかけてキリスト教を禁止するために、それまで貿易外交を盛んに行っていたポルトガル、スペイン、イギリスなどと次々に断交を行い、欧米船の入国、日本国民の海外への渡航、また海外に在住する日本人の帰国を禁止し、「鎖国」という語がイメージするような国際的孤立を 1639 年に完成したことは事実である。しかし、その目的は仏教国の宗教政策として単に異教であるキリスト教を禁止したのではなく、キリスト教宣教師による感化の後、近代化された軍隊を送り込み植民地化する西欧諸国の帝国主義政策の手法を熟知していたために、外国からの侵略を水際で殲滅しようとした防衛手段だったのである。むろん、その 215 年間、日本は国際的に孤立し、閉鎖した文化形成が行われたという見解に立つべきかも知れない。しかし、近年の日本研究では、当時の日本の政権の中心であった江戸徳川幕府が「鎖国」と称して、完全に排他的な国際的孤立を謀った政策をとっていたのか疑問視するようになってきた。今回の発表では、そ

の点について 17 世紀に絞り、当時の世界的にも有名な文学者「西鶴 (Sai-kaku, 1642-1693)<sup>(2)</sup>」の作品群を視座として分析したものである。

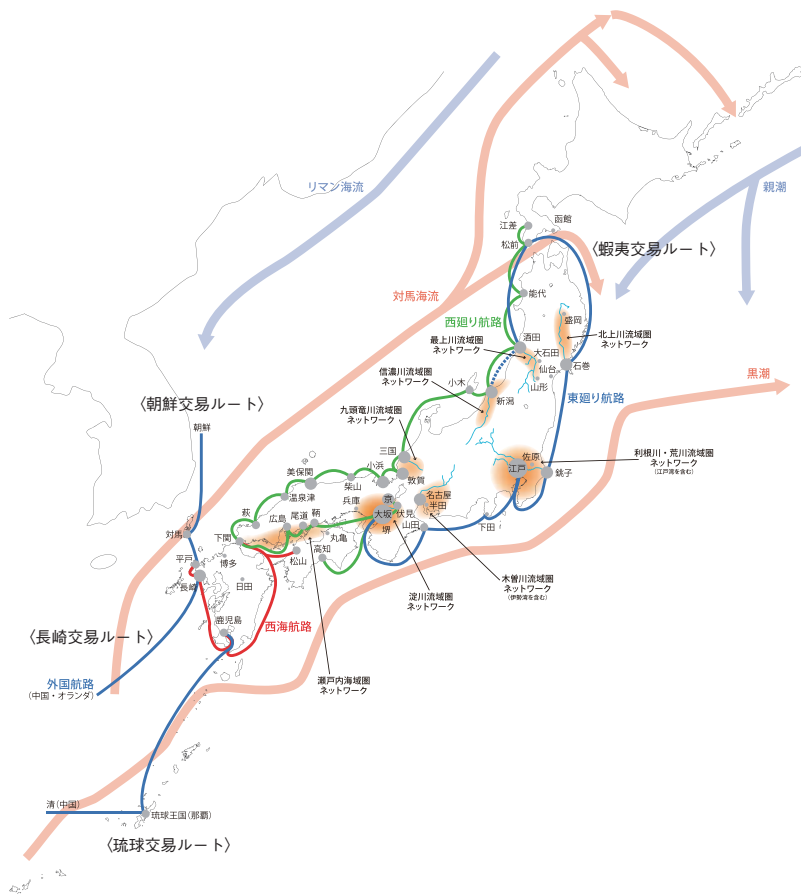
## 2. 「鎖国」という幻想

近年、先に紹介した「鎖国」という語について「この語が広まったのは、長崎出島オランダ商館付医師として来日したエンゲルベルト=ケンペル<sup>(3)</sup>が帰国後出版した「日本誌」の中の一章を長崎通詞志筑忠雄が享和元年（1801）「鎖国論」と題して邦訳し、幕末の日本知識人に影響を与えたことによる<sup>(4)</sup>。」という事実も浸透しつつある<sup>(5)</sup>。つまり、「鎖国」という語は現実には 19 世紀から用いられ、一般的に鎖国が成立したと認識している 1639 年の外交政策に対して、当時の人々が言い表した学術用語ではないのである。

実際、鎖国後とされる日本にあっても、政府は四つの世界との文化・経済交流のルートを確認していた。一つはオランダや中国と貿易する長崎・出島であり、一つは琉球（沖縄）を介した中国、南アジアとの交流であり、そして、もう一つは対馬を介した朝鮮との交流であった。これにもう一つ加えるのが北海道の松前藩、アイヌ民族を介しての交易である。古くからアイヌは中国北方民族のツングースとサハリンを経由して交易していた（山丹貿易）が、江戸時代になると松前藩を置き、有力商人たちがアイヌ交易を徐々に支配していったという実態が解明されつつある。以上のように、徳川幕府という政府は、1639 年に「鎖国」を宣言して国際断交に踏み切ったのではなく、1639 年に海に囲まれた島国という利点を活かした中立外交に踏み切り、世界との文化・経済交流の窓口を四つのルートに絞り、貿易と出入国を管理したと言い換えることができるのである。

それでは、「鎖国」という語はどのようにして 19 世紀の日本の人々に浸透していったのであろうか。

加工貿易中心の現在の日本からは想像し難いが、古くから日本は貴金属輸出国として世界に知られ、特に 16 世紀は「金」、17 世紀は「銀」「銅」の産出量



が世界における上位国として君臨していた。当時の西欧、中国などの商人達の記述には、この情報が多く残されており、鎖国前の日本の国際的交易市場は、世界から海を遠く隔てた東洋の端の島国に危険を冒してでも船を走らせることで、多額な利益を得るという伝説を信じてやってきた命知らずの貪欲な商人たちに思いのままに搾取され続けた。結果として、金は 16 世紀に、銀も 17 世紀に掘り尽くされ、特に日本銀は世界の商人から上質な純度と評判が高く、同

じ銀でも国際市場では高いレートで取引されていた。そのことによりやく気づいた政府は慌てて銀の持ち出しを禁じ、銅を中心とするなど、さまざまな貴金属流出防止策<sup>(6)</sup>を行うが、鎖国後も日本の貴金属輸出国としての役割は変わらず、しかも日本の金銀比率は他国よりも破格的に不利であったため、19世紀中頃には国内のほとんどの金・銀・銅が流出し、徳川幕府の財政は逼迫し、産業革命などで力をつけた欧米の近代国家とは比べものにならないほどの貧困国となっていった。

さらに、その徳川幕府の経済的衰えに拍車をかけたのが、18世紀に日本を襲った自然災害の多さである。富士山、浅間山などの噴火は天候不順の要因となり、農作物は不作となり、東日本を中心に多くの餓死者まで出た。地方の農村は離村者を出し、彼らは生きる場所を求めて大都市江戸に向かい、治安は悪くなり、経済は停滞した。

そのような状況に日本の人々が不安を覚えている時代、18世紀中頃から19世紀にかけて市場開放を迫るロシア、欧米諸国の軍艦が日本近海にやってくるようになった。イギリスを始めとする西欧各国は軍事力を拡張し、植民地を増やし、その小さな国土からは想像がつかないほどの巨万の富を得て大帝國となっていたが、国家統一に遅れた後発のロシアやアメリカはその利益搾取の場をアジアに向け始めていた。そのため、「鎖国」という語が浸透した19世紀の日本には、そのような欧米列強の経済的・軍事的に圧倒的に上位にある外敵に立ち向かう精神的支柱が必要となってきたのである。

その頃、日本には水戸藩を中心に「尊皇攘夷」という思想が流行していた。「天皇家を尊んで夷狄をはらいのける」という意味が本来の「尊皇攘夷」思想は、「幕藩体制の矛盾の激化と対外危機とによって、天皇の絶対化と排外主義が結合し、特に水戸学によって鼓吹され、やがて王政復古に至る幕末政治運動の大きな潮流となった」と説明される<sup>(7)</sup>。すなわち、「尊皇攘夷」思想は、それまで三百余りの藩とその集団のリーダー徳川幕府という関係で成り立ってきた個々バラバラの共和国的な政治共同体を、天皇を崇める「日本」という唯一の「国家」として意識させることには成功した。それが明治維新につながった

エネルギーの一つであったことは間違いない。ところが、その中の過激な人々は、世界の圧力によって存亡の危機にある小国日本であるが、今日まで日本という国家を守ってきたのは、欧米世界との交流を自ら断って、「鎖国」という歴史を歩み、栄光ある孤立の中で日本独自のすぐれた文化形成を行ってきたおかげだ、という根拠のない自負と幻想を抱くようになった。それが19世紀になって「鎖国」という語が流行した理由に起因しているのではなかろうか。「鎖国下日本」という実態を解明するには、明治維新を愛する多くの日本人の文化意識の改革も必要ではあるまいかと考えている。

### 3. 西鶴の同時代から見る「鎖国」の実態

さて、広義の「鎖国」政策はキリスト教を宣教しようとするロシアを含む西欧諸国に対しての取り締まりであって、キリスト教の宣教は行わないことを約束したオランダやアジアの隣国、中国、朝鮮は視野にはなかった。その一方で徳川政権は国際文明に立ち後れている日本の国力を十分に把握しており、全政権時代を通して、最新の世界情勢の収集に努力していた<sup>(8)</sup>。日本は国際社会の中で無策に孤立を選んだのではなかったのである。

ただ、国際感覚を忘れなかったのは時の政府首脳だけではなかった。武士でも公家でも大商人でもなく、市井に住む人々もそうであったはずである。その点を確認するため、以下、日本の17世紀、大阪・上方文壇に君臨した「西鶴」という人物から分析したい。

西鶴は出自こそ不明なものの、早くから大阪天満宮の西山宗因に俳諧を習い、多くの俳人の中で頭角を現し、十代から師匠となり、大阪の文壇の中心となった。ほぼ、同い年の俳人に芭蕉(1644-94)がいるが、彼は西鶴に10年以上遅れて江戸で有名になる。当時の日本経済の中心は江戸より大阪にあり、経済の豊かさは民衆に読書の歓びを教え、文化の水準をあげた。西鶴は矢数<sup>やかず</sup>俳諧を得意とし、1日四千句を一人で詠んだり、ライバル(Rival)が現れると一昼夜に二万三千五百句も詠み、「二万翁」と呼ばれるようになった。しかし、

師匠・西山宗因の死によって生じた一門の争いに嫌気が差したのか、突如、小説を書いて、小説家としてデビューした。

その最初の作品が『好色一代男』（1682）である。当時、実在した遊廓の太夫と遊ぶ主人公・世之介は生涯に三千七百四十二人と契った上、日本を離れ、女性ばかりの女護が島に旅立って行くという奇想天外の小説である。単なる女性遍歴の羅列ではなく、日本の古典の名著『源氏物語』『伊勢物語』のパロディーとして文学史的評価も高い。現在なら何気ない世之介の最期であるが、理想郷を探して日本から船で世界の海に旅立つという結末は渡航禁止の鎖国の時代に許されない発想である。ところが『好色一代男』は木版印刷である。多くの人々に受け入れられたことは間違いない。初版は好評完売、続刊が出版された。加えて当時組織として確立したばかりの貸本屋にも多く売られたことも知られている。さぞかし、多くの読者を獲得したに違いない。鎖国の定義からは御法度破りにあたるはずの『好色一代男』が政府の取り締まりにあわなかったという、この事実一つだけでも「鎖国」の幻想性が窺われる。また、西鶴は何をするかわからない、日本人の規格から外れた人間としてあだ名を「オランダ西鶴」と呼ばれたが、これも外国人を排除しない当時の国際意識を知る上で面白い事実ではなかろうか。

西鶴は『好色一代男』の後、『好色二代男（諸艶大鑑）』『好色五人女』『好色一代女』などの好色物、『武道伝来記』『武家義理物語』などの武家物、『西鶴諸国ばなし』『本朝二十不孝』『本朝桜陰比事』などの雑話物、『日本永代蔵』『世間胸算用』などの町人物など二十作品近い小説を出版している。すべてほぼ短編集であるから、『好色一代男』だけでも五十四話あるように、その話の数は驚く多さである。

西鶴作品名に「日本」とあるが、西鶴と同時代に活躍した戯作者近松門左衛門（1653-1725）にも『日本振袖始（にほんふりそではじめ）』（1718）があるように国家としての「日本」という意識は、幕末の明治維新に向けた近代国家としての統一とは違った民族意識として注目できる。特に近松の場合、浄瑠璃『国性爺合戦（こくせんやかっせん）』（1715）が作品化され、あまりの好評に

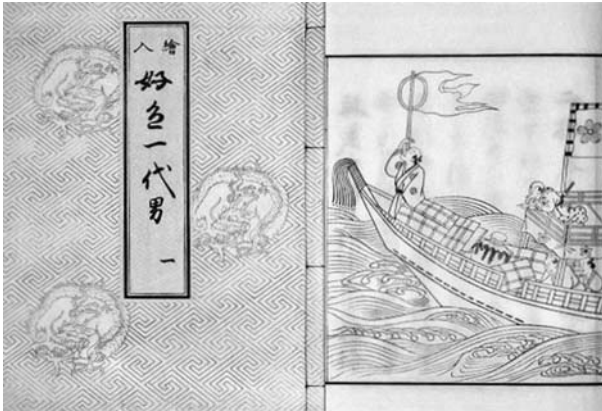


図2 西鶴『好色一代男』表紙と最終章挿絵（『国文学研究資料館影印叢書』より）

浄瑠璃作品が初めて歌舞伎としても上演された（義太夫狂言）が、それは当時の人々の関心の高さによると考えられる。『国性爺合戦』の梗概は以下である。

中国の大明国が鞏鞏国に攻められ皇帝が殺される。明国の父と日本人の母との間に生まれた「和藤内」<sup>だつたん</sup>（わとうない、倭国でも唐でもないという意味）、のちの鄭成功（ていせいこう）が、明国で大活躍する物語。祖国の危機を知って、両親とともに大陸に渡る。千里ガ竹で虎退治した和藤内は、異母姉錦祥女（きんしょうじょ）の夫甘輝將軍を味方にしようと獅子ガ城に出向き、母と姉の犠牲的な行為によって甘輝の力を得ることに成功する。戦を勝利に導き、逆臣の李蹈天（りとうてん）を討つ。功績をみとめられ皇帝から朱という国性を贈られ「国性爺」と呼ばれる<sup>(9)</sup>、として話はめでたく結ばれている。

『国性爺合戦』が好評であった理由は、中国における明の滅亡、それに伴う北方民族・清王朝の成立、その中で明国の遺臣・鄭成功が「抗清復明」を掲げ清に立ち向かったこと、その鄭成功が徳川幕府に助力を求めに来たのに幕府は援軍を送らず、明王朝復活が叶わなかったことなどの国際情勢を日本の幕閣だけでなく、民衆も熟知していたからであろう。

それは鎖国政策が影響しているというより、日本という海に囲まれた島国国家が海によって外敵から守られながらも、逆に海を隔てるために大陸の情報や

文化が入りにくかったという長い歴史の中で培った、自己防衛としての生きる術ではなかったろうか。

鎖国が日本の自己防衛策であったことは 1635 年に発令された「大船建造の禁止令」をめぐる一連の動きからも推察できる。この発令は大船＝海外渡航船＝三本檣船、大船建造禁止＝海外渡航絶対禁止＝三本檣築造禁止という論理として、海外渡航を禁止するための鎖国政策であったとされるが、船の基本構造に「竜骨」「三本マスト」を用いないことは守られるものの、その際に発令された五百石（約 1.25 t）以上の船を造船禁ずるという命令は、遵守された形跡がほとんど見られない。この頃から、日本海、太平洋の寄港地を廻り、地方から大坂・江戸に米を搬送する弁才船は、一応に同じ大きさで、別名を千石（約 2.5 t）船と呼ばれ、幕末まで日本海運の主力を担った。日本帆船は安全な沿岸航法をとったため、座礁を避けた小回りの利く船としながらも、流通の効率化も考慮しなければならない。その妥協の大きさの船が千石船であったわけで、沖合航法主体の西欧を真似た大型船では水深の浅い瀬戸内海などが通れなかったのである。事実、朝鮮通信使の大型船を迎えて苦勞した話しは多く残っている。

したがって、大船を造船する技術はあった。その最も有名な大船は「安宅丸（あたけまる）」である。三代将軍徳川家光の命で造船された軍艦式御座船（将軍の旗艦）「安宅丸」は 1631 年に竣工し、「大船建造の禁止令」が出た 1635 年に完成している。船体は長さ 38 m の竜骨に、45 本の肋骨を配して外板を張る西洋式の構造であるが、船首尾などは日本式構造である。推定排水量は約 1800 t、これは当時ヨーロッパ最大最強の軍船として恐れられていたイギリスの“Sovereign of the Seas”に匹敵した巨大戦艦であったが、海戦用というより、江戸湾を守る移動要塞的発想で造船された。結局、ほとんど使用されず、1681 年解体された。この直後にも水戸藩で蝦夷地探索船「快風丸」が造船されたというが活躍できず、結局、日本の商人達は小回りが利き、費用対効果が良い方を選び、千石船が一般的となったのである。この大型造船に対する対応の甘さを見ても、幕府がどこまで海上封鎖による鎖国政策を真剣に取り組



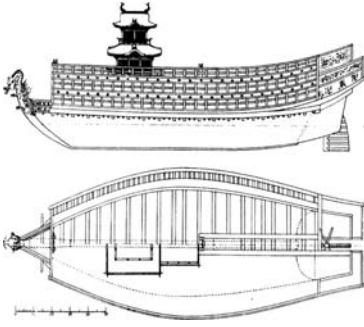


図3 安宅丸復元推定図（石井謙治著『和船Ⅰ』法政大学出版局より）

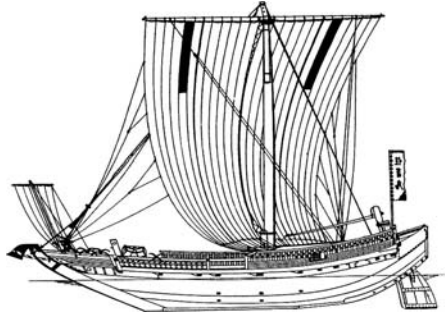


図4 弁才船（石井謙治著『和船Ⅰ』法政大学出版局より）

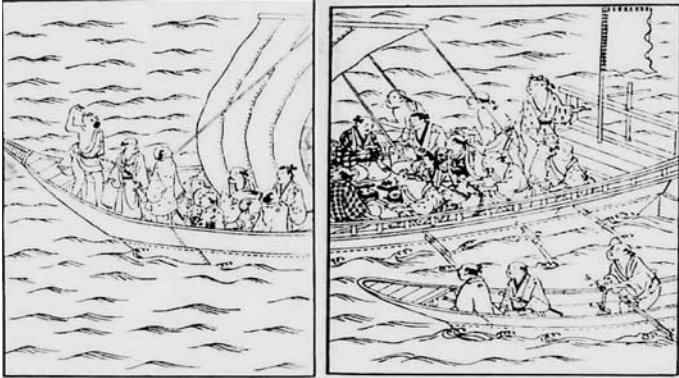


図5 『日本永代蔵』巻1の3挿絵（新編日本古典文学全集 井原西鶴集（3）より）

もうとしていたのか不明である<sup>(10)</sup>。

西鶴作品はこのような大船に限らず、船の利便性を高く評価する言葉を随所に散りばめており<sup>(11)</sup>、後述する『日本永代蔵』巻1の3「浪風静かに神通丸」では架空の「神通丸」としてではあるが、三千七百石の廻船の活躍を賞賛している。当時の出版禁止令<sup>(12)</sup>をかいくぐって、このような大船の存在が堂々と暴かれるのも、幕府の鎖国政策が厳格化していなかったことをものごとっているのではあるまいか。

#### 4. 西鶴作品から見る四つの交易ルート

『日本永代蔵』[六卷六冊、貞享五（1688）年刊]は、西鶴爛熟期の浮世草子として、江戸時代前期、高度成長から低成長へと移る元禄期前後の「銀が銀をためる世の中」を生きた日本各地の商人たちの生活を活写した経済小説の原点として評価が高い。西鶴はこの 30 作品を集めた短編集において、約三分の一が自分自身の知恵・西鶴で大成功をおさめた商人の話、三分の一が裕福な商人が零落する話としている。特に、商人の道義を外れて儲けた者の末路は「天（God）」に裁かれて哀れな最期を遂げるとしている<sup>(13)</sup>。

その『日本永代蔵』には 4 つのルートのうち、2 つの実態があげられている。

一つ目は、朝鮮との交易ルートである。対馬島の府中藩にとって、この交易ルートの必要性は公的には無高であったが、幕府から十萬石以上という高い家格を与えられていたために、それなりの経済収入を得、対馬の人々に米を中心とした食糧を確保することであった。そのため、毎年、朝鮮から米一万六千石余を輸入して家臣への給米にあてたほか、藩財政のかなりの部分を朝鮮貿易に依存していた。いわば、対馬藩と呼ばれた府中藩は北海道の松前藩とともに、三百藩もある日本の中で公的に農耕より国際貿易で国内（藩）を経営することを許されていた藩であったのである。したがって、その交易のため、江戸藩邸のほか、京都・大坂・壱岐勝本・博多（のちに廃止）・長崎に蔵屋敷、朝鮮釜山に倭館をそれぞれ置いていた。その出先機関を通して、京・大坂では輸入品の売り捌きと輸出品の調達、長崎では長崎奉行との外交・貿易上の連絡と輸出品の調達が行われた。釜山倭館では朝鮮との日常の外交業務や貿易が営まれ、数百名の家臣・商人がおり、館守をはじめとする藩の役人や、外交僧・医師などまで常駐するなど活発な日朝外交を行っていた。

西鶴の活躍した 17 世紀後半には、藩政改革の成功、朝鮮貿易の活況、義成の代からの銀山開発の成功と活況などによって、西国一の分限（大金持ち）と

いわれた。その豊かな経済的背景から文化的にも発展し、対馬藩には木下順庵門下の陶山訥庵（鈍翁）・雨森芳洲・松浦霞沼ら学識豊かな儒者が抱えられ、藩の学統の基礎となった<sup>(14)</sup>。

しかし、貿易で豊かになるということは価格交渉において、もめごとは絶えず発生していたと想像できる。その点を西鶴は見逃さず、『日本永代蔵』巻4の2「心を畳<sup>たたみ</sup>込む<sup>こ</sup>古筆<sup>こひつ</sup>屏風<sup>びやうぶ</sup>」に日朝貿易での一悶着を描いている。

・むかし<sup>しま</sup>対馬<sup>たばこ</sup>行き<sup>たばこ</sup>の<sup>たばこ</sup>貧<sup>たばこ</sup>乏<sup>たばこ</sup>とて、ちひさき箱入りにして限りもなく時<sup>は</sup>花<sup>や</sup>り、大坂にてその職人に刻ませけるに、当分知れぬ事とて下づみ手ぬきして、しかも水にしたし遣はしけるに、舟わたりのうちにかたまり、煙の種とはならざりき。唐人これをふかく恨み、その次の年、なほ又過ぎつる年の十倍もあつらへければ、欲に目のあかぬ人、我おそろしと取り急ぎ<sup>くだ</sup>下しけるに、大分湊に積ませ置きて、「去年たばこは水にしめされ思はしからず。当年は湯か塩につけて見給へ」と、皆々突き返され、自<sup>おのづ</sup>からに朽ちて、磯の土とはなりぬ。

この場合の「唐人」は「朝鮮人」である。対馬経由でタバコを輸入するのが好評だったことに目を付けた悪徳業者が、ある年、わからないだろうと思って、下の方の積み荷には粗悪なタバコを置き、しかも水までかけて重量をごまかしていた。そのために船で運搬中にタバコが固まり、朝鮮に着いた時にはタバコとして吸えなくなっていた。朝鮮側の買い主は怒り、一計を案じて次の年は十倍の量のタバコを発注した。日本の欲張りな業者は喜び、対馬まで運んだが、朝鮮側は一向に積み荷を取りに来ない。ようやくやって来た朝鮮側の商人は「去年のタバコは水に濡れて使えなかった。今年は湯か塩でもかけたらどうかね」と言って、積み荷を全部突き返して朝鮮に帰っていったという話である。この日朝貿易での一悶着のエピソードを紹介しながら、西鶴はこう評している。

・これを思ふに、人をぬくことは跡つづかぬ。正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば仏陀も心を照らす。(この事件を聞いて思うのは、人をだます仕事は長続きしない。正直であれば神様も頭に下りてきてくださる、清廉潔白ならば仏様も心を照らしてくださる。森田訳)」

すなわち、西鶴は日本の商人の道義のなさを嘆いているのである。西鶴は大坂の商人であったという。それだけに大坂商人の恥のようなこの話題に怒りを覚えたのではなからうか。しかし、西鶴はこの箇所<sup>ていれん</sup>に先立ち、「広き世界を知らぬ人こそ口惜しけれ。(広い世界を知らない人は残念なものだ)」として、日本の商人に比べて、「大唐人(中国または朝鮮人)」は実直で口約束でも間違いなく守り、絹織物を巻いても奥の方の品質を変えたりしない、漢方薬にも不純物を入れてごまかしたりしない、とその律儀さをほめている。「木は木、銀は銀に幾年か替はる事なし」という品質管理の大切さを忘れた日本の商人達、皆への教訓として、国際的立場から論している。西鶴の日本人が交易を介して世界市民として、天下の商人として道義的手本として認められたいという熱い思いが感じられよう。日朝貿易ルートは単なる二国間で終わる交易ルートではなく、日本が国際社会にその高潔な精神性をアピールする手段と捉えていたのである。この考えは西鶴一個人の特殊性ではなく、当時<sup>しんめい</sup>の上方を中心に活躍していた商人達すべての願いではなかったろうか。

二つ目の交易ルート、長崎貿易は出島を介し、オランダ・中国に代表される大陸世界に開かれているルートなので、儲けも大きく「長崎商い」は商人の憧れであった。西鶴の作品にも多く描かれ、長崎貿易で大金持ちとなった **Success Story** も数多い。『日本永代蔵』巻6の3に登場する、大坂堺に住む「長崎商ひ」の商人などは今は200億円近い資産を持つが、始めは友人10人から一人につき、一千万円ずつ出資してもらい、それを元手に成功したとしている。長崎での商売は世界を相手にするので儲ければ大金持ちになれるが、輸入品の落札制度のため、入札に加わるだけでかなり多くの金額の元手が必要であった。『日本永代蔵』巻5の1「廻り遠きは時計細工」の挿絵には、世界との

交易で賑わう長崎の出島の様子を描いているが、長崎を「日本富貴の宝の津」と呼んでいる。挿話として舶来物の「金平糖」の製法を独力で割り出して大儲けした小商人が、さらに「この男菓子をやめて小間物見世を出し、なほ才覚の花をかざり商売に身をなし、その一代に千貫目持とはなりぬ」とモデルのありそうな大金持ちになった商人の話あげている。日本全国、特に京都、江戸、大坂、堺からやって来た投機になれた賢い商人達は、生糸・絹着物・薬・サメの皮、何でもあり、そこに輸入されてくるものなら何でも買って大儲けしていたことを西鶴他でも多く描いている。「神鳴のふんどし襦つのだい鼻褌、鬼の角細工、何にても買い取り、世界の広き事、思ひしられぬ」（巻5の1）と長崎が夢の国際貿易港であったことを「世界」という語を用いて語っている。これは、西鶴に限らず、日本の商人達にとっては鎖国下日本であるからといって、国際社会での貿易孤立主義などという意識がなかったことを物語っていよう。もちろん、キリスト教の布教を水際で止めようとするための禁書輸入の取り締まり<sup>(15)</sup>は、芭蕉の弟子向井去来の父向井元升に見るように極めて厳格に行われていたが、こと西鶴の作品にあっては、そのことに関する記述はない。西鶴を含めて当時の多くの人々は、キリスト教に関する禁書輸入取り締まり制度そのものを知らなかったのではなかろうか。

ところで、それならば世上の商人は、長崎商いをしていれば皆、大金持ちとなるばかりとなるが現実には市場や相場の見極めが難しく、必ずしもうまくは行かず、失敗する例も多い。西鶴は「長崎に丸山といふ所なくば、上方の金銀無事にあきなひ帰宅すべし。ここ通ひの商、海上の気遣ひの外、何時をしらぬ恋風おそろし」として、その長崎で大儲けした金銀を無事上方まで持ち帰る大きな障害として「丸山遊廓」の存在を上げている。「丸山」とは「江戸の吉原」「京都の島原」「大坂の新町」について全国に知られる遊廓である。丸山遊廓は美人揃いで有名であったが、手練手管に長けていることでも有名であった。西鶴はその悪所をこのような形であげて、世態人情と金銀の織りなす humor とすることを忘れない。このおかしみ溢れる形象方法こそが世界の人々から西鶴文学が愛される所以なのである。

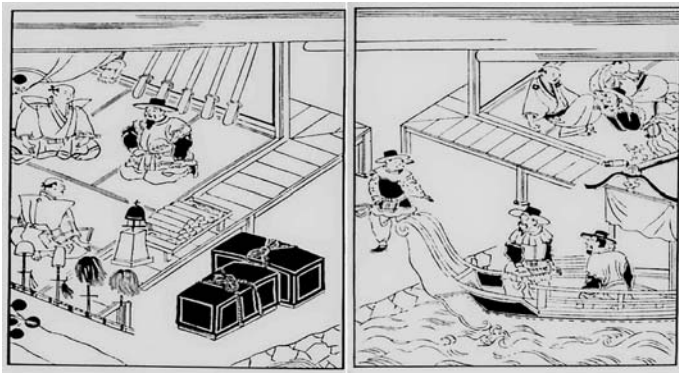


図6 『日本永代蔵』巻5の1挿絵（新編日本古典文学全集 井原西鶴集（3）より）

三つ目の交易ルート、琉球（沖縄）からの流通交易ルートは存在したもののあからさまには語れなかった。それは琉球王国が江戸時代になって薩摩藩の支配下に置かれたからである。したがって、それまでは「貿易国家」「海洋国家」の名声通り、中国や東アジア海域の交易国家であったが、薩摩藩に属してからは砂糖の生産地として重宝がられたものの交易の実態は隠され、最近になって文書・記録が明らかになりつつある。もちろん、第2次世界大戦の沖縄戦によって焼失、散逸してしまった資料もあるであろう。ただ、江戸時代の人々は朝鮮通信使同様、不定期ながら琉球使節が江戸参府を行っていたため、その存在と日本との関係は知っていた。もっとも正確には琉球は使節を日清両国に送っていたので、琉球からの恩謝使・慶賀使と説明した方がいいかも知れない。恩謝使とは鹿児島藩の命令・監督のもとに琉球国王の即位を感謝するために江戸に派遣される使節で、それは徳川将軍の襲職に対する慶賀使と一緒に行われることがあった。恩謝使・慶賀使は琉球王国の一代一世の儀礼で両者を江戸上りと称している。寛永11（1634）年の最初の江戸上りから、最後の嘉永3（1850）年に至るまでの二百余年に18回派遣されている。薩摩藩は他藩に付庸国の領有を誇示するために、江戸上りの使節にことさらに大和風を禁じ、服装や言葉、立居振舞に至るまで異国風を強制した<sup>(16)</sup>ので、沿道を埋めた当時の人々には清冽な記憶と話題を提供したのであろう。

その一方で、薩摩藩は琉球交易を独占し、非公認の国際貿易を行い、密かに財源を確保しているのではないかというという疑念も向けられていたのではないだろうか。日本の半世紀以上前の時代劇映画全盛期にはそれを「密貿易」と呼び、公儀隠密との争いの種としていたが、幕末の莫大な薩摩藩財政赤字解消に手腕を発揮した家老調所広郷に「密貿易」の嫌疑がかかったように、琉球交易は人々から巨額の富を生み出す「打ち出の小槌」と信じられながらも、そのことに触れるのは禁忌であったのではあるまいか。

西鶴作品も随所に薩摩の名をあげているが、「琉球」の名が直接あがるのは、『好色五人女』[五卷五冊、貞享三（1686）年刊]巻5だけである。『好色五人女』は西鶴と同時代に自由恋愛に生きた実在の5人の女性が主人公となった物語である。巻5は「琉球屋」の娘「おまん」が主人公である。薩摩の武士源五兵衛の美男子ぶりに琉球屋の娘おまんが片思いし、最後には二人の恋は成就して、琉球屋の身代を受け継ぎ、巨万の富を得るという話である。薩摩の話ながら「琉球屋」の屋号でもわかるように巨万の富は「琉球」との貿易によって得た資産である。挿絵は金貨・銀貨の詰まった錢箱とともに「人魚の塩引き」など珍妙な物が収まる庭蔵の絵であるが、本文には日本国内では滅多に入手できない「伽羅（東南アジア原産の香木）」「唐織（からおり）」「珊瑚珠」「柄鮫（つかざめ）」「青磁」などが収蔵されていたとする。当時、いずれも舶来物として高値で取引されていた珍品である。西鶴の頃は琉球ルートの交易実態が不明であったとはいえるものの、『好色五人女』という物語の大団円が何故、琉球貿易の繁盛ぶりで終わらなければならなかったのであろうか。従来の定説は巻1「お夏清十郎」、巻2「樽屋おせん」、巻3「おさん茂右衛門」、巻4「八百屋お七」と道ならぬ恋に走り処刑された実在の事件を扱っているので、当時の演劇形式からは巻5はめでた話の祝言形式で終わる必要があったとする。首肯できるものの、巻5だけが犯罪話ではないとしながらも、あえて琉球貿易をもって終幕とするところに、当時の経済流通ルートに明るい西鶴ならではの薩摩藩と幕府へのアイロニーが込められているように思うのである。

最後の四つ目の蝦夷交易ルートの存在は、西鶴の頃には結構知られていたよ



図7 『首里那覇港図屏風』(沖縄県立博物館・美術館)より



図8 『好色五人女』巻5の5挿絵  
(新編日本古典文学全集 井原西鶴集(1)より)

うである。

当時、北海道はユーラシア大陸の一部と信じられ、松前藩だけが支配していた。その松前藩は北海道の最南端に知行し、江戸時代以前より和人(先住民アイヌ人に対する呼称)住居地とアイヌ人住居地を明確にし、互いの共栄を計ってきた。松前藩の最大の特徴は、その大名知行権が石高に裏づけられた土地の支配権ではなく、蝦夷地交易の独占権を公認されて一藩を形成していたのである。始めは松前三湊(みなと)だけであった地域が、江差(えさし)、箱館(はこだて)と広がり、近江商人などが進出して交易拠点を増やしていた。先住民であるアイヌ人の生活の基盤は、漁撈・狩猟・採集であったので、和人との交易は自分たちが採った鮭・鯡・貂皮と和人の運んできた米や酒との物々交換であった。やがて、その繁栄ぶりを聞きつけた日本各地からの移住者が増え、現地で昆布やニシンなど海産物を採る生活定住者が増えてきた。さらに西廻り航路の開発などにより、大坂で米、古着などを買いつけ、生活が豊かになると、日本人は松前に内地と変わらぬ城下町を形成し、ついにはその経済地域は和人居住区域を越境して、アイヌ人居住区域である北海道、千島、樺太など広大な地域を実質支配するようになった。日本の商人たちの進出は物々交換とは言え、アイヌ人にとっては不公平さ、不正に不満を抱く者が多かったが、松



前藩は巧みにアイヌ人部族間同士の争いを利用して実行支配を続けた。しかし、ついに1669年、大酋長「沙牟奢允（シャクシャイン）」のもと、アイヌ数部族が集まり、松前藩に反乱を起こした。松前藩は初め圧倒されたが、江戸の松前藩分家が工作するなどして、幕府の命により東北諸藩から援軍が加わり、反乱二ヶ月で双方和睦することとなった。しかし、その席上でシャクシャインは謀殺され、以降は松前藩が広く北海道、樺太、千島を支配し、協力的なアイヌ部族を介して、遠くロシアや清国などとも交易を行った。18世紀後半から北海道、樺太探検が盛んになり、間宮海峡の発見などから江戸幕府は北方領土開発を推し進めようとしたが、南下政策をとるロシア帝国からしばしば開国を求められ、海防危機の緊張のまま、明治維新を迎えることとなった<sup>(17)</sup>。

西鶴も松前藩や蝦夷地のことをよく知っていたようである。『西鶴諸国ばなし』〔貞享二（1685）年刊〕の序文では昆布の話、『本朝二十不孝』〔貞享三（1686）年刊〕巻4の4「本にその人の面影」では病死した母親に化けた古狸を射殺した兄弟を裁いた松前藩主の話、『武道伝來記』〔貞享四（1687）年刊〕巻2の4「命とらるる人魚の海」では松前藩で起こった人魚探索に絡む娘による父親の敵討ちの話、また先述の『好色五人女』巻4は有名な江戸放火事件の八百屋お七が主人公であるが、その恋人吉三郎の念者は松前にいることとなっている。西鶴作品は日本各地の諸国話という方法が基本形であるが、松前が他の地域より辺鄙な場所にもかかわらず、比較的多く作品化されているのは注目できる。

ただ、現代の我々にとって大阪から北海道はとても遠隔地で不思議であると言えようが、当時の人々にとっては、江戸と大坂の間が歩いて、船に乗っても14日かかっていたが、松前から大坂までも船に乗れば片道14日で行くことができた。大坂に住む西鶴にとって江戸も松前も同じ距離感だったのである。おそらく頻繁とは言わないまでも行ったことは何回かあったのであろう。事実、森田の科研調査<sup>(18)</sup>によれば、松前藩主の菩提寺「法幢寺」には談林俳諧の宗匠西山宗因の連歌が残っており、松前藩主との交流の一端が残っている。西山宗因は大坂天満宮に住み、西鶴の俳諧の師匠として、それまで「鶴

永」と名乗っていた西鶴に「西」の字を与えた人物である。もしかすると、西鶴自身が隠居するまで商人であったという説に従えば、実際に松前、蝦夷の地を訪れた可能性も否定できない。

むしろ西鶴が蝦夷地を知りすぎていたとすれば『本朝二十不孝』巻4の4冒頭に「無物世界なる国里、和朝すゑすゑまで、今はなかりき。殊更、世の掟も静かなる松前の城下……」とわざわざ断るのが先述のシャクシャインの乱の平定後の和人支配（仏教支配）を揶揄していると指摘できて面白い。また、『武道伝来記』巻2の4の父親について「松前の浦々の奉行役人に、中堂金内といふ人、里々の仕置きして回りし時」と記すのも、当時の松前藩の役人が和人居住地だけでなく、沿岸部支配を行っていた実態を示すものとして読める。そうすると西鶴は松前の読者まで想定していたこととなり、西鶴の世界観に驚かされる。

以上、西鶴に限らず、当時の海の交易ルートを知る人々は、鎖国どころか想像以上に世界市民として情報を得ていたのではなかったか。夢をふくらましつつ、結びとしたい。



図9 『本朝二十不孝』巻4の4挿絵（新編日本古典文学全集 井原西鶴集（2）より）

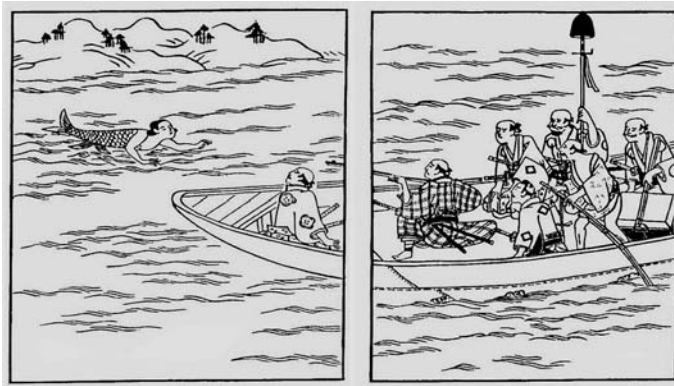


図 10 『武道伝来記』巻 2 の 4 挿絵（新編日本古典文学全集 井原西鶴集（4）より）

#### 注

- (1)(4) 『日本国語大辞典』（小学館）、「鎖国」の項目による。
- (2) Poet and writer of popular fiction whose novels and stories are now ranked among the classics of Japanese literature. Also known as Ihara Saikaku. “Saikaku【西鶴】”, Encyclopedia of Japan.
- (3) Kämpfer, Engelbert, 1651-1716, 1690 年長崎に赴任、約 2 年間の滞日中に 2 回 オランダ商館長の江戸参府に随行した。日本での地理、風俗、動植物などの観察記録をもとに『廻国（かいこく）奇観、Amoenitatum exoticarum』（1712、ドイツレムゴーで刊行）、『日本誌、The History of Japan』（英訳本、1927 年ロンドンで刊行）などがある。
- (5) 大島明秀著『「鎖国」という言説－ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史－』（ミネルヴァ書房 2009. 1）等。
- (6) 徳川幕府は 1685 年に初めて、長崎貿易に対し、金・銀による貿易決済の年間取引額に一定上限を設定するなどした、定高貿易法（さだめだかほうえきほう）を發布するなどして、貴金属流出を食い止めるが、江戸時代を通じてこのような制度は一定化せず、流出防止策と緩和策を繰り返した。
- (7) 『日本国語大辞典』（小学館）、「尊皇攘夷」の項目による。
- (8) 江戸幕府初代徳川家康は、イギリス人「William Adams 1564-1620」を側近として日本に永住させイギリス型帆船を造船させ、イギリス東インド会社との交渉にあたらせるなど厚遇した。オランダ人「Jan Joosten van Lodensteijn ?-1623」の場合も同様であり、オランダ東インド会社との交渉にあたらせた。さらに鎖国完成後も毎年、オランダ商館長に江戸参府を命じ、国際情勢の把握に努めてい

- た。
- (9) 実際に鄭成功は 1645 年、隆武帝から明王朝の姓（国姓）である「朱」姓を賜わった。
  - (10) 石井謙治著『和船Ⅰ』（法政大学出版局 1995）。
  - (11) 拙稿「西鶴の海と舟の原風景 『西鶴大矢数』にみる地方談林文化圏の存在」篠原進・中嶋隆編『ことばの魔術師西鶴 矢数俳諧再考』（ひつじ書房 2016. 11）所収による。
  - (12) 今田洋三著『江戸の禁書』（吉川弘文館 1981）に詳しい。
  - (13) 谷脇理史著「経済小説の原点『日本永代蔵』（西鶴を楽しむ2）」（清文堂書店 2004. 3）。
  - (14) 『国史大辞典』（吉川弘文館）、項目「府中藩」による。
  - (15) 拙稿「江戸時代におけるキリスト教の禁書（An Inquiry into the Forbidden Books on Christianity in the Edo Period）」『キリスト教主義教育研究室年報 26』（関西学院大学キリスト教主義教育研究室 1998. 3）
  - (16) 『国史大辞典』（吉川弘文館）、項目「恩謝使・慶賀使」による。
  - (17) 松前町町史編纂室『松前町史 通説編第1巻上・下』（1986, 1990）、松前町町史編纂室『概説 松前の歴史』（1994）、チューネル・M・タクサミ、ワレーリー D. コーサレフ著『アイヌ民族の歴史と文化』（明石書店 1998）、榎森進著『アイヌの歴史と文化』（創童舎 2004）を参考にした。
  - (18) 文部科学省科学研究費、課題番号「24520252」「地方談林俳諧文化圏の発展と消長～西鶴の諸国話的方法との関係から～」（平成 24 年度～平成 28 年度 森田雅也代表）

・西鶴原文は、『新編日本古典文学全集 井原西鶴（1）～（4）』（小学館）を用いている。  
 ・なお、本稿にあげる船の知識は、石井謙治著『和船Ⅰ・Ⅱ』（法政大学出版局 1995）、安達裕之著『日本の船 和船編』（船の科学館 1998）を参考としている。  
 ・図 7『首里那覇港図』掲載に際し、沖縄県立博物館・美術館に便宜頂いた。記して感謝したい。

※1. 本論攷は 2017 年 11 月 25 日、韓国・江原大学校日本研究センターにおいて講演した「鎖国下日本と世界との文化交流～西鶴文学を視座として～」に基づいている。

※2. 本研究は文部科学省科学研究費、課題番号「17 K 02480」「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究～海川・物流網を視座として～」（平成 29 年度～平成 33 年度 森田雅也代表）として研究助成をうけている。その成果公表の一部である。

——文学部教授——